

兎に角當時の堺の状態を、畫家が見て描いた物だと考へられます。その圖の上に見えて居ります切支丹のお寺と云ふものは、今日見受けるところの耶蘇の會堂のやうなものでなく、日本風の建築物であつたのであります。而も日本西教史の中に、慶長元年に上方に大地震があつた際に、堺の教會堂は崩れなかつたと云ふ事を敘述してあります。其所に重要な人名が一ツ見えて居るのであります。それはジャック・ヒンブラ Jacques Fimbra とあります。即ちジャックと云ふのは基督教名で、又ヒンブラ・リョウケイと書いてあります。

此はヒンブラと云ふのは、日村とでも讀みますか、リョウケイは何う書きますか、マア發音通りに書けばリョウケイです。此人が自分の家を、三十年間耶蘇の會堂として宣教師に使はせて居つた、それは三層樓、即ち三階建であつた、併しながら其信仰が固かつた爲めに、神の咎めも無くして、周圍の建物はみな壞れたけれども、此三階のチャーチは崩れないで居つた、と云ふ様な事を書いて居ります。【補註】

このリョウケイと云ふ人は、どの位の商人でありましたか、恐らく商人であらうと考へます。が、何う云ふ字を宛てますか、何う云ふ人であつたかと云ふことは、向後調査して見たいと思ふのであります。これに據るとマア自分の自宅を「チャーチ」にして、さうして宣教師共に使はせて居つたと云ふのである。日本でも貴族が、自分の邸宅をその儘佛寺に直してやつたと云ふことは、昔から多々あるのであります。かう同じ一例が西教史の中に在るわけでありませぬ。これを何うかして、大學に在る慶長頃の切支丹年報の材料で一ツ發見して見たいと思つたのであります。未だそれを見當ることが出来ませぬ。他日この西教史を手掛りとして、根本材料をもう少し調べて見たいと思ひます。で、若しこれが確かであるとすれば、南蠻船の屏風一双、一方に於ては出船、他方に於ては入船を畫いてあります。出船の方には西洋見たやうな場所が描いてあり、入船の方は船が帆を下して、堺のやうな港に這入つて来る所で、其の海岸には商賣屋が軒を列ねて、輸入品を賣つて居る、その建物も二階、三階のものが巍然として建つて居る、さうしてその三階の所には、祭壇のやうなものが設けてあつて、其所で宣教師が説教をして居る、或はマリヤの

像などが懸つてある、其の前に基督信者が跪いて、禮拜して居るやうな圖がありまするが、我々は前の記事と、一半は想像をも加へて描いたと思はれる南蠻屏風に描寫して居る所とは、髣髴として相似て居ることを認むるのであります。

以上申上げた通り、永祿からして先づ慶長年間までが、堺に於ける基督教の沿革の概要であります。慶長十九年に至り、徳川幕府が鐵槌を下し、全國の基督教の大禁制を致しまして、寺々を破壊し、或は焼捨てる、さうして宣教師はみな海外へ驅逐する、信者の主なる者は、これを海外に追放すると云ふやうな手段を執りました。其時に堺には、種々の信者が潜伏する處があると云ふので、特に幕府は吏員を派して、其取調を嚴にしたと云ふことが出て居ります。此は足利時代から、堺は一種の特權を有つて居つた所でありまするから、上方に亂があつたり何かすると、彼の基督教の宣教師ヴィレラや、フロイス、オルガンチーノ（日本の記録にはウルガン）などと云ふ人も、堺へ避難をして來て居つた事がある、そんな風で堺は避難所であつた。これは基督教徒ばかりでなく、其他の者も矢張り難を避

けて此所へ來て、息を繼いだ人は尠なくなつたのでありまするが、宣教師などは兎角堺へ逃げ込み、堺と云ふ特別な自由の港に匿まつて貰つたものである。そんなやうな風ですから、慶長十九年の大禁制の時にも、幕府は特に吏員を派して堺の取調べを嚴重にしたやうな譯であります。

其後元和、寛永に掛けましては、パゼスと云ふ人の日本傳道史に、慶長の末から元和、寛永に掛けての近畿地方の布教状態、これを極めて簡單ながら、彼方此方に略敘して居りまするが、それに據つて見ると、寛永の頃までは、堺あたりに信者は亡びないで、依然信仰を維持して居つたやうでありまするが、段々年代が經るに従つて、さう云ふ痕跡も無くなつて來たやうであります。

それから徳川時代になりまして、和蘭人が貿易の爲めに日本へ參りましたものは、大抵兵庫に上陸して、陸路をすつと北の方を通つて來ましたか、或は更に兵庫から、海路を大阪へ來ると云ふ様な譯でありまして、堺は通らなかつた。只堺と云ふものが、大阪の南の

方に在ると云ふ事だけを、ちよつと録いてありますが、兎に角和蘭人の紀行の中に、堺の事を餘り録いてないのであります。

それでありますから、彼の展覽會に、モンターヌと云ふ人が、日本の事を録いたものがありまして、あれには堺の圖も描いてありますが、あれは殆んど出鱈目のやうに見える圖であります。此モンターヌと云ふ人は、日本へ來た人ではないので、たゞ彼方に居つて、基督教の傳道報告だとか、基督教の歴史だとか、或は和蘭人の報告誌、貿易日誌とか、さう云ふものに依つて編纂したものであります。即ち文章家ではあつたが、實歴した人ではないので、あゝ云ふ想像圖を描いたのでありませうが、兎に角和蘭人は、堺に就いての知識を有つて居らなかつたのであります。

それから慶長の末から元和の末まで、約十年の間、日本で貿易を營んだ英吉利人は、堺を相當に知つて居つた。堺にも貿易家の代理店のやうなものがあつて、此地で、この上方筋の貿易に従事して居つたのであります。けれども基督教の年報には、この堺の貿易の事

は殆ど録して居りませぬ。

### 三 近代文學に反映せる堺の異國趣味

先づ歐羅巴人の眼に映じたる堺、或は歐羅巴人の史料に現はれたる堺と云ふものは、大體こんなもので、極めて貧弱なものであります。向後當市の方でも、種々の史料を集められて、いろ／＼研究を重ねられる事でありませうし、私自身も亦さう云ふ方面の研究を進めて、もう少し材料を得たいと思つて居りますが、今日までの所では、まづこれ位に止まるのであります。それでかう云ふ南蠻貿易時代、或は基督教布教時代の反響として、徳川時代の文學にも、多少その痕跡を遺して居りますので、それをこれより暫時申上げて、この講演を終りたいと思ふのであります。

元祿時代の俗謡を蒐めました、「松の葉」と云ふ有名な歌謡集がありますが、其中に、長崎の方の事が能く取入れてありまして、長崎の小唄には、「昔より今に渡り來る黒船、縁が

つくれば鱸の餌となる、さんたまりや」と有名ながあります。能く人の知る所でありま  
 するが、實に意味深長であります。其後に、「さんたまりや」と云ふ文句が入れてある。か  
 う云ふやうに、長崎のローカルカラーを織り込んだ小唄のやうなものが、この堺にはない  
 か何うか、隆達の小歌集などを見ましたけれども、どうも堺の特色を詠んだものはない。  
 何所にも當嵌りさうなものばかりで、どうも堺だけの地方色を帯びたものは、遺憾なが  
 ら發見致しませぬ。只「松の落葉」と云ふ、「松の葉」の補遺のやうなものがありまして、  
 寶永年間に京都で出して居りますが、それに、「堺の濱踊」と云ふ題目で、二上りの歌が  
 あります。それをちよつと読んで見ませう、「堺の濱にありやこりや、流れ枯木がすててあ  
 る、……………定めて……………唐木からぎでござるべいよの、さんがれ」とありますが、かう云ふ  
 やうなものは、昔、三味線でも弾いて唄つたならば、さぞ堺の特色を發揮して、面白いも  
 のであつたらうと思ひます。かう云ふ方言的の訛なんかを詠んで居るところはちよつと面  
 白い、他の普通の唄には見られないものであります。

それから明和元年に集めたものであります。「山家鳥虫歌」と云ふものがあります。  
 これに和泉國の俗謡が二十一種ありますが、此中に、特に堺に限つたことではありませぬ  
 けれども、例の「風がものいやことづてしよもの、風は諸國を吹きまはる」「むかし思へ  
 ば恨めしござる、なぜにむかしは今ないぞ」といふ、坪内さんが新曲浦島に採られたのが  
 あります。是等もまあかう云ふ堺のやうな貿易港などには、幾らか相應はしいローカルカ  
 ラーを帯びたもののやうにも思ひますが、併しながら異國情調を表現したものと云ふ譯  
 ではない。先程讀みました「松の葉」の唄にあつた、「さんたまりや」の小唄のやうに、ロ  
 ーカルカラーの濃厚なもののないのを遺憾と致します。

所ろが大正年間に出版された本であります。「俚謡集」と云ふものがあります。三重  
 縣の志摩郡、即ち志摩國の盆踊りの唄にさうら節さうらぶしと云ふものがありまして、此に堺の特色  
 を發揮したものがありますから、それを讀みあげて、皆さんにお傳へしようと思ふので  
 あります。それは先づ、それに書いてある事から推察致しますると、戰國時代の俗謡の、

多少轉訛したものであらうと思ふ。その俗謡を詠んだ時代は、徳川氏の以前、或は大坂が發達する前であつたらうか、或は天正時代か、文祿、慶長以前であらう、と考へて居ります。それは非常に面白い唄で、私の好きな唄であります。先年既に或所で紹介もしておいたことがあります。其盆踊りの唄に、「われは十七若い身なれど、旅も都もまだ見ず、親の勘當は被ぶつても、其身は都参りをせうずもの………」、つまり親から叱られても、まだ旅もせず都見物もしないから、一遍都見物に行つて見ようと云ふ譯です。で、先づ第一番に奈良に参りまして、「奈良の春日のまつりを見れば、お馬そろうて………」と、まあこんな風に奈良の事を簡単に叙して、今度は「奈良を出てから堺に着きそよ」とある。「そ」と云ふのは「候」の略でありまして、奈良を出てから堺に着きますと、「堺港に繋るお船は、なんば船とはあれえかのう」、この「南蠻船とはあれかのう」と云ふ所、又堺港の光景と情調が出て居る、南蠻船とはあれかいなと驚嘆する譯です。「堺出てから、やがて程なく住吉の、宮へまゐりて、石の鳥居とはこれかのう」、これから先が面白い、茲で句

調をちよつと轉じて唄ふのですが、「あとに親御がなげきなすやら、なんぼ今夜のお夢に見えそよ、いざやもどろや友達」とある。つまりこんな風に、志摩あたり、即ち今の三重縣あたりから、親にも告げずに出て國を立ち、奈良へ來ては、春日のまつりなどを見て面白かつたが、今度は堺へ來て、随分珍らしい南蠻船を見ては、あれが南蠻船かいなアと驚いた、それから住吉の石の鳥居を初めて見て興味が湧いた、そこで種々見物して、まだ都に行かない内に、若い者がちよつと郷里のことを想ひ出したのでありませう、「後に親御がなげきなすやら、なんぼ今夜のお夢に見えそよ、いざやもどろや友達」と、かう云ふ風に單純であります。この俗謡は長いのでありまして、全部讀んで見ると、餘程興味津々たるものがあります。その中に、「堺みなとにかゝるお船は南蠻船とはあれえかのう」と言うてある、この感動詞の中に、無量の面白味が籠つて居るやうに想はれるのであります。こんな所が、徳川時代の文學の中に表はれたる、堺文學の名残であるのであります。此他には、狂歌師の半井卜養、即ち慶友と云ふ俳名の人があります。松永貞徳の門下の

俳話を集めた、犬子集と云ふものがあります。其犬子集の中には、堺の住人が十九人居ります。京都の人が四十八人、大阪の人が僅に一人這入つて居ります。これも徳川時代の文學史を通觀するに非常に面白い現象であります。京都の人が四十八人、堺の人が十九人、大阪の人が僅に一人で、江戸の人が二人這入つて居ります。この犬子集と云ふのは、寛永十年の編纂であります。寛永八年から始めて寛永十年に完成したものであります。その中に、この半井慶友の句が大分見えて居ります。その慶友の詠んだ堺の句も見えれば、また他國の俳人が堺へ來て、詠んだものも若干見えて居ります。此慶友の句の中に、耶蘇の事や、南蠻船の事を詠んだものが、五六句見えて居ります。【補註3】

それも茲に讀み上げて、皆様の興味をそゝりたいやうな氣もするのであります。今日は三時までで終る豫定でありましたが、最早十五分も過ぎて居りまして、餘り自分の好きな事ばかり喋々辯じ、而もこれは歴史の區域を脱して、文學の方面に移つて居りますので、主催者の方に対しても相済みませぬし、皆様にも御迷惑であります。で、たゞ今

日は、足利時代から徳川の初期に掛けての、小百年間の堺に於ける南蠻との貿易、堺に於ける南蠻布教の當時の状態、及びそれが後世にどう云ふ風に反映を有つたか、と云ふ事について、聊か興味があるので、最後に附加へて申上げた次第であります。

つい種々の事を調べて來まして、餘計な事を申上げたり、又急いだ爲めに、ごちや／＼に申上げたりして、少し順序を亂したり何か致しましたので、甚だお聽苦しかつたであらうが、いづれ他日筆記に手を入れまするなりして、皆様の御一覽を煩はし得れば、大變結構だと思ひます。今日はこれで終ります。 (大正十四年三月刊、堺市史講演集)

【補註1】 昨大正十三年十一月八日拙講の際には、ウイレラ O. Vidra が堺の状況を報ぜし通信文の原本を、本邦に於て見るを得ざりしたため、止むなくマードック氏の日本近世史所引の文に據つて概要を紹介したりしが、今般東上中に東洋文庫を訪ひ、はからず主任石田文學士の厚意によりて、該通信文を收めたる日本書簡集を一閱することを得たり。この書簡集は例の小形の本なれど、頗る厚き一冊子にして、西紀一五七〇年即ち元龜元年葡國コインブラの出版にかゝり、葡萄牙文を以て綴

らる。予は卒爾一五六一年即ち永祿四年より以下一五六二（永祿五）一五六三（永祿六）年等にわたりて、堺より發信せるウイレラの書簡を一見したれど、精讀し又抄録するの暇を得ざりき。堺の大勢に關しては、二六六乃至二六七枚目に見ゆる所が、マードックの譯出引用せる條に當れり。即ち一五六一年（永祿四年）西曆八月十七日附の書簡中カルタにあり。全書簡集の内容については、他日別に紹介するの機會を得んとす。本書は舊臘初めて歐洲より舶載せられ、東洋文庫の手に歸したるものなる由石田氏より聞く所なるが、一冊殆ど千金に價したる稀籍に屬せり。（大正十四年一月二十八日）。尋いて四月中旬東上するとき、大島男爵が、この書簡集の増補本カルタスの一五九八年（慶長三年）版なる大冊本を得られたるを一見せり。

【補註<sup>2</sup>】 ヒンブラは、その後日比屋（ヒビヤ）の誤寫誤植なるべきを知るに至れり。元和六年の記なるハビアンハビアンの破提字子の本文緒言に「泉南ノ津ニテハ日比屋ノ一黨ハ、商家ナガラモ提字子ノ檀那ニテアリシガ、此等ノ一族タチハ死然ヲ得ズシテ亡ビニキ、此等ノ子孫今何レニカアル」とあるによりて推定し得べし。日比屋を Fimbia と綴るべきを Fimbria と誤りしものならん。ヒエ（比叡）ヒエを Fire（フレ）と誤りし例を以て察すべし。但し日比屋のこと未考。

【補註<sup>3</sup>】 耶蘇征伐記卷一に禁教後京都の吉利支丹退治のことを敘し、式部卿八條智仁親王の陪臣本郷織部の子、意伯なるもの禁裡仙洞等へ出入せしが、耶蘇宗の由露顯し父子死刑に處せられしといへる後に、慶友法印も耶宗なりしが、白狀して赦されしことをいへり。外科の達人にて禁裡仙洞に召出されたる由あり。この京都の慶友法印といへる外科醫は、堺の出身にて、後年江戸に召抱へられし慶友法眼半井卜養（慶長十二年生、延寶七年歿、七十二歳）と別人なりや否や、姑く記して疑を存す。

## 南蠻畫屏風の感興

感興より研究に入り、研究より感興が涌く。私にとつては感興がむしろ生命である。私の感興が漲つて而も研究の機縁が熟せずは何年か過ぎしつゝあるもの一つに南蠻畫屏風がある。

私が南蠻畫屏風を見た最初は今御物になつてゐる駿府英長寺舊藏のそれである。私がまだ十二三のころ、明治二十年二十一年時分のことであつたが、この屏風は一時静岡の町はづれ大岩村にあつた私の實家の表座敷におかれて當時修業さかりであつた青年畫家村田丹陵君の手によつて輪廓を模寫されつゝあつたのを憶えてゐる。南蠻船の帆柱の上を猿のやうにつたはる蠻人の異様な姿などが幼稚な私の眼をひきつけたもので、海岸の商人や門前

の伴天連などには注意が向かなかつた。二十二年の春父が歿した前後から、この屏風は見えなくなつてしまつた。年たけてから聞くと、あれは徳川家へ納まり、それから皇室に献上されたのだといふ。駿國雜誌卷二九下によると、府中横内村の大用山來迎院英長寺といふ知恩院の末寺で寺領三十石を頂戴してゐた寺に、土佐某の筆にして唐人を畫いた御屏風があり、それは家康公から二代目の住持廓山和尚に賜はつたものだといふ。明治三十八九年の頃であつたか、この屏風のことを史料編纂の辻君に話した結果、大日本史料第十二編慶長十九年正月吉利支丹禁教の條にその一部分の寫眞が掲げられることになつたが、丹陵畫伯の手許にあつた模寫は、一昨年の大災に亡びてしまつたと思ふ。惜しいことである。

こんな因縁から今日まで凡そ四十年近くの間には私は何十となく南蠻畫屏風及びその寫眞を見た。明治三十九年東京帝室博物館に於ける異國物の大展開のをりから、大正十一二年前ごろ上智大學のダールマン師がその研究を發表するまで十數年の間に世人の觀賞に上つた屏風の數は何雙あつたことであらう。大正九年ごろには田中豐藏君の研究も出たことであ



つた。明治四十三四年ごろ大津の西本願寺別院に所藏のものは、私の南蠻記の口繪に使ひ、その後河本重利君の所藏で京都大學寄托の一雙は、英國皇太子殿下の台覽にも供したことがある。私は歐洲の博物館にも二三を目撃したが、巴里のミュージー・ギメーには、その開展寫真帖までも出来てゐた程である。かういふ東西學徒の研究や内外好事家の蒐集がある際に、これを比較研究するのは相當に面倒である。無論東京の震災で焼失したのも多少あつたらうが、最も惜むべきは、渡邊修二郎君が模寫をとらせておいた堺港の南蠻屏風といふものの原品が亡びたことである。昨年十一月の堺市史料展觀會にも陳列された模本や寫真を見ても藝術的價值が一段高いのを認められる。時折の賣立品のうちにもこの種の屏風が出てゐたことは珍しくもない。婚禮衣裳や若き娘の裾模様にも南蠻船を染めてあるのは知る人ぞ知るが如くである。和田三造畫伯が大正六七年頃の製作に南蠻繪更紗があつたが、それはたしかにこれらの屏風から胚胎した意匠である。

感興から蒐集乃至登録へとすゝみ、比較や研究を経ぬうちにそれからそれと物が出て来る。昨年の秋黑板君と岩井君とから室生寺に南蠻畫屏風が半雙あるといふ話を初めて聞いた。鑑真和尚の東征記を讀んでその南海漂泊や波斯船奪略の話などを追想すれば、何人も唐招提寺にあゝいふ屏風のあるのも相應はしい因縁だとおもふであらうが、性靈集を見て福州觀察使書を読めば、室生にかういふ屏風があつても萬更でもない様な氣がする。すると源豐宗君から本誌の創刊號を贈られると共に、その屏風の全部寫真と一二ヶ所の細部寫真とをいたゞくに及んで、私の南蠻船屏風に關する感興は更に高まつて來た。その上、同誌で小島貞三氏の室生印象記をも見て、私は研究には必要のないこの山の環境を頭のうちに畫いたりしてゐる最中に、何たる奇遇か、榛原の木水彌三郎君から、三たび室生の屏風の事を報ぜられ、而も他の半雙は東京の某華族の有に歸してゐるといふことをも書加へられ、尙又室生の風土を略敘して私の好事癖をそゝられた。

唐招提寺の屏風は昔博物館で見ただけで記憶がなく、又その寫真も一二の書に出てゐたと思ふが、今座右にその書がないから、その構圖も、描法もこゝに髣髴することは出來な

い。然し室生の屏風とよく似てゐるといふ話である。對照することは出来ぬが、室生の屏風は描法が頗る古拙に見える。寺に残るのは南蠻より日本の港への入船を描いた六曲半雙であるが、左方にゑがいた着岸船は、極古風な造りの船で、畫卷物などにある唐船の様に見えて南蠻船とは見えない。波止場や海岸の模様でも規模が小さく、概して寫實味の少ない畫である。右方の二曲の上部に描かれた殿堂の一部、すなはち廻廊と其一端展望所の如き一室との如きも宏壯な建物とは見えぬ。廊下には三人の圓顛の西教僧が、展望所に端座して入船を見守れる頭領株の人の方へ徐行しつゝある風姿といひ、港町を貿易商たちの方へ向ひゆく様態といひ、さては洋装せる彼我の商人の態度といひ、舟子も運搬者も見物人も馬匹もすべて沈靜にして活動を缺き、遲鈍な風に見えて敏慧の氣がない様に思ふ。貿易品の描寫も甚だ貧弱たるを免れない。見世店の飾付けもあまりにみすぼらしげに見える。ダールマン師の解釋によると、これら一雙の屏風の一は精神界すなはち宗教の方面をあらはし、他は物質界すなはち貿易の方面をあらはすものとすれば、この室生の屏風半雙は後

者を表現するものであるから、こゝに寺院をゑがかず、禮拜堂をゑがかず、僧形を對立せしめること甚だ少く又軽く、即ち一言せば宗教的一面の表現が大に稀薄であるのも當然であるかも知れぬ。ダールマン師のかゝる二元的解釋法は、少しく哲學觀に過ぎはしまいかと思ふので、若し畫家の寓意がそこにあるとせば全く師の買被ぶりであると申さねばならぬが、ともかく面白き見方にはちがひない。室生の屏風の場合についていへば、いづれ他の半雙を見出し得た後に二元對立の工合を研究しなければならぬと思ふ。

次に人物の風貌服飾を見るに、海岸に見物する三四の人々、屋内に在る二三の人々を除くと、みな洋装なるうへに、彼我の容貌の相通へる點がいちじるしく眼につく。商客も西僧も日本人の容貌をそなへ、畫家が殊更誇大して西洋人をゑがかうとした趣がない。人物の調子がいかに動きがなく、奈良繪を見るやうな感じがあつて、全體が古拙に見えると評してもよからうと思ふ。

エキゾチックなこの題材が徳川初期に珍重されて何十となく慶長前後の畫家によつて屏

風に畫かれて、多くあちこちの寺院に納められ、貴族富豪の有に歸したことは、風俗畫の史料として見逃がすべからざる所である。近世の純粹の繪畫史料としてよりも價値はむしろ近代の風俗史料として重要であるに相違ない。私はこれを機縁として感興より研究に進みたいと思つてゐるが、それは他日を期さねばならぬ。これらの屏風の上に現はされた教會堂なり禮拜堂なりの建物や間取りなどは、西洋式よりは日本風、エグリーズよりはお寺を模したものであるが、元來西教が日本に弘布した初めからして、山口の大道寺や平戸の天門寺、京の南蠻寺、いづれも日本がはの稱呼ではあつたが、みな寺といふ名を冒してゐたのであつた。説教に翻譯に日本の僧侶上りを利用したことは彼我の切支丹史籍に散見してゐる通りである。傳來の初めには西域の佛教などと呼ばれたこともあり、禁教の後には南佛などと熊澤蕃山によつて稱せられたことがある位である。されば過海大師の聖蹟や弘法大師の靈地に保存せられたこれらの南蠻屏風をこの佛教藝術の雜誌の上に説いたところで由緒がないわけではなからう。昨年八月伊賀の名張に旅したとき、初瀬街道はあの橋

を渡りてとさし示され、室生の山はあなたぞと教へられて、音にきく五重塔をゆめみつゝ意やゝ動いたことがあつたが、それはまだあの屏風も知らなかつたころのあこがれであつた。さあかうなると、芭蕉翁の檜笠や鈴屋大人の菅笠とは事かはり、御代の有りがたさは自動車に打のり、ついと出かけて來たいと氣がいらだつのである。

(大正十四年三月、佛教美術)

## 洋人郊外遊樂圖の小屏風

本年三月恩賜京都博物館に開かれた明治以前洋畫展覽會に於て異彩を放つた西洋風俗圖の小屏風が一雙あつた。題して郊外遊樂圖といひ、六曲で横一丈三寸五分縦三尺六寸、東京の子爵松平直徳氏の所藏である。今より二十年前明治三十九年東京帝室博物館に催された嘉永以前西洋輸入品及参考品展覽會にはこの小屏風は會津の松平子爵家の各國帝王圖四曲屏風、南部伯爵家の傳蒲生氏郷妹持參の西洋畫六曲屏風、相馬子爵家西洋人風俗圖六曲屏風と共に出陳され、又特に其一部分の寫眞を目錄中に收められたこともある。いづれも一雙物の油畫であるが、この中の或ものは既に美術の雜誌にも載せられてもあつたと思ふ。今春この愛すべき小屏風が展覧されて再び而して京阪の地に於ては初めて此種洋畫の愛好

者や美術史の研究者の眼に觸れる様になつたのは洵に喜ばしいことである。所藏者松平子爵家は越前の結城秀康の子孫として寛永より天和に至るまで越前に在り、天和以降播州明石を領した家柄であるが、この屏風の傳來については、私は未だ何等聞く所がない。筆者は無論不明の儘である。

この小屏風畫に於て最も人目をひく所は、既に太田喜二郎畫伯が注意された通り、人物の描寫と景色の筆致とが相反する點である。畫伯の指摘された要旨は私等の講演集にあらはれることであるが、前景なる人物の畫を切抜いて背景なる風景畫の上に糊ではりつけたのではないかと思はれるほど、相矛盾するやうに見えると思はれた。いかにも然うである。後藤博山君が全部複寫し又特に各雙から三曲を三色版に現はしたものを加へて出版した明治以前洋畫類集によつてこの小屏風の構圖を一見しても、人物と風景との境界の自然さがよくわかる。前景の人物は手本による忠實なる模寫にちがひない。姿態手振表情などがわざとらしく見えて、多くの人物が生氣を缺いてをる。立つてゐる男女の姿勢や顔容

は、同じ展覽會にも出陳された田邊工學博士の對幅西洋男女圖のそれに酷似してゐる。但しこの對幅は、私が先年この圖を藝文の口繪に載せて解説した時分には二曲の屏風に仕立ててあつたものである。

人物は近景にも遠景にもあちこち離ればなれに二三人もしくは數人づゝ小さな一群をなして畫かれてゐる。大抵中年か青年であつて一雙の方の兩端に老年の人が一人づゝ控へてゐるだけである。離ればなれの一群づゝは男同志また女同志もをれば男女うちまじつてもゐる。然しいづれも楽しんで淫せざる程度以内に和樂してゐるだけで快活げな氣分が漲つてゐない、どの群も多少陰鬱げに見える。平和な空氣が充ちてゐるが沈靜に過ぎた態度の人のみである。敬虔に溢れてゐるが活氣があまりに缺けてをる。品位は備はつてゐるが情趣に乏しいの憾みがある。一方から云ふと時代がらで宗教畫の流れを汲んだためでもあらう。他方から評すると泰平な徳川時代の諸侯の所持品としては恰好な代物と云へよう。即ちこの繪畫の宗教的傳統が適者生存の理法にかなつて残つたものと考へられるのである。

然し各の群れや連れはいくらか同じ様態の反復はあるが相當に變化がみとめられる。それらの互に連絡のない各伴侶には奏樂するもの散歩するもの會話するもの相談ごととするものなどがあるかと思ふと、騎馬のもの二三くみ舟遊するもの一二艘、小羊の群を守る牧童、鳥をさがす獵人、一端には年寄りの教師らしいのがうつむき加減に書をひろげて讀んでやつてゐるを、若者がその傍に踞して仰むきながら聽きほれてゐる、他の一端には岩に寄添へる信心深い老翁が半ば杖に身をさへる様にして年わかき武士に何か説諭してでもゐるやうな所がある。丘上には音樂に興する一群、水邊には物語に耳傾ける一群、隨分變化がおびたゞしい。愛の美童アモールの小殿堂の左右には古風なオオボエかチャルメイラの様な樂器を吹いて讚仰してゐる。あなたの洞穴の裡には豫言者めいた姿をした石像があざやかにうかゞはれる。果物の籠を頭に載せた一人の百姓女、薪を荷へる四人の樵夫、これはまた小屋のうちの井戸がはから出現する奇蹟にでも驚いたのか、その驚愕の態、いさゝか全畫面の單調を隅ツこの方で破つてゐる。

かくの如く全面に幾多の人物が點綴されてゐるが、音楽が全體の中心を成し、個々の群を統括つて一の交響樂をおこしてゐる。女が立つて武人に聞かせてゐる豎琴のねは、隣的女同志の一人が爪弾きするマンドリンの調子に諧ひ、右手のあちらに高らかに響くオオボエは水をわたりてきこえる。一雙の方には、羊群と讀書と説教との沈靜な前景に對して、岡の上にヴァイオリンをひく男、その前には樂器を地に措いて横はりつゝ聽く男、すべて男性が中軸になつてゐる。

人物と景物との不調和は遠近法の不整ひのみならず先づ前景の羊群に於て著しく現はれてゐる。都踊の背景と舞妓との比例のやうにも見える位、人物と景色との大小遠近が相違することは昔の描法に於て恕せなければならぬが、羊群だけは可笑しいけれど、これも模様と見てしまへば、それで良からう。馬は雙騎三くみいづれも上手に出來てゐると思ふ。

帆船も輕舸も無難であらう。ともかくも平和の氣みちみちたる水郷の和樂は、かゝる一部一部の不調和や缺陷を蔽ひ盡して綜合的に氣持のよい印象を觀る者に與へて畫は成功を收

めてゐる。

水は海か湖か、どちらにも見える。青海波のさゝ立つてゐる模様も全體の靜穩な情趣に諧つてよい。背景に至つては遠近法をとり入れた點に於て在來の描法と違ふし、目なれぬ草木のこんもり鬱蒼たる姿は洋風な趣も見えるが、前面の草や花の如きは日本畫を脱しな。殊に牡丹の花を點出したところなどは最も著しい。丘陵山岳の相重疊して湖海の水面の遙に開けゆくところに大船小船の或は走り或は泊するあたり、水邊の城郭また港町の建物をはじめ農家や小堂に至るまで森の樹木などと共に異國めかしてあるのはありがたい。羊群のある方の一雙の右手に瀧を落した池やその周邊の趣はむしろ土佐繪の様に寫されてゐる感じがする。

天空の畫き方に至つては和様であつて雲のたゞすまひは全くさうである。薄い金粉を塗つて空をぼかしてある趣向、殊に三日月を雲間にあらはした有様は畫風には不調和かも知れないが、夕ぐれの靜けさをあらはすには効果があり、夕陽の氣分には調和してゐる。尤

も薄暮の光線は描かれてはゐないが、日没の近さをすべて人々の行動があらはしてゐると見られないであらうか。最も面白いと思ふのは羊群の一雙の方の左手に聳ゆる樓閣に、朱塗の欄干が附いてをり、人が欄に倚つて望んでゐる光景である。建築が正しく幾何學的に寫されてゐて人物と大小の差別がつかないのも妙である。建物の形状も岩石の形状も互に異様を成してをる。

色彩の材料や技巧に至つては、私の知識は全く絶無であるが、緑青の顔料を草木の色に惜氣もなく濃厚に使つてあるのが目立つのと、服飾に赤色を鮮かに際立たせてあるのを特筆しておくにとゞめる。何處までが在來の顔料で何處からが舶來の洋畫具かを解析するのは私たち素人の力には及ばない所である。

ともかくも日本畫の描法が西洋畫の特色のうちに攝取されて、一種折衷的な、和臭を帯びた洋畫が、屏風畫となつてこゝに現はれてゐる。調子はどこまでも西洋風である。前景の人物に外來の新様を摸し背景に國土のお里をあらはした例は歐洲の繪畫にもある。例へ

ばフレイミッシュの畫法を習つた伊太利の畫工にもあつた。唯この小屏風繪の構圖が大體に於て如何なる手本から出てゐるか、如何なる組合せを試みたものか、等の問題は私の未だ研究に手を着けぬ所である。畫家は無論不明たること前述の通りであるが、私は私の所謂南蠻系統の畫家の手に成つたものであつて、即ち吉利支丹傳統の日本畫工が筆にした西洋風俗圖に外ならぬものとだけは云ひ得ると思ふ。時代は寛永以前で先づ慶長時代の作品としてよいと信ずる。尤も寛永年代までは下らせ得るし、又吉利支丹系統の日本畫家が宗門を脱して歸正後に於て洋風によつて畫いたと解釋することも出来れば、或はその以前に畫いた畫のうち、宗門に關するものは焼却され、而して無難な構圖のものだけが残つたので此屏風も其一であると思ふ様に考へてもよい。極大略な所では徳川初期の作だと言へば間違ない。今日残存する吉利支丹の宗教畫には、この小屏風畫に匹敵する様な大作はない。伊達家の支倉の像、林若吉氏のマリヤの像の如き舶載の油繪などは別物であるし、又金屬版にゑがいた宗教畫の逸品數點もあるが、日本風の洋畫には宗旨關係のものでは、

この種屏風畫に及ぶコンポジションのものは當然一つも残つてゐない。

私は先年南蠻系統の洋畫に關する史的考證を試みたことがあるが、それには信徒山田右衛門作の名を擧げてその略歴を述べ、又長崎夜話草と長崎の先民傳とに出てゐる二三の蠻畫師について一言した。殊に生嶋三郎左衛門は有名であつて、先民傳に據れば、少時薩摩に往き、同地在住の蕃人に就いて蕃畫の妙を得、その弟子に野澤久右衛門といふ善畫者を出した。夜話草には、南蠻紅毛油繪の風を傳へたる者ありとなし、生嶋は異國人直傳にて蠻流なりしとある。先民傳には、又華蕃の畫法に工みであり、殊に肖像畫を能くした喜多元規の名を録した。この人の畫は今日も長崎にある様であるが、生嶋の方は傳はらないかと思ふ。これらの二書に南蠻といひ又略して蠻とも蕃ともいふのを、私のいはゆる南蠻系統（葡西伊など）の吉利支丹であるとせば、彼等はやはり山田右衛門作の徒輩と伍すべきであらう。勿論今考究しつゝある小屏風畫の畫工に擬するわけにはゆかないが、畫家の範圍をきめる一資料とすることは出來ようと思ふ。山田については、故森鷗外博士は「山口

古菴」と題する簡潔なる考證文を作り、それが全集第一卷に收めてある。

私は以上數名の外に新に一人の吉利支丹畫家を知ることが出來た。パジエスの日本基督敎史第十八章、一六一五年（元和元年）の條に慶長十九年に南方に追放された高山右近等日本の吉利支丹の末路を略叙した中に、これらの謫者は多く死亡したが、翌一六一五年正月即ち慶長十九年十二月の末にマカオで他界した耶蘇會のイルマン Marcio Trichico といふ日本人は、優秀な畫家で本國の天主堂は大部分この人の裝飾に由るといふ事が見えてをる。註して肥後國宇土の人、行年四十一歳法臘八歳とある。さればこの人も亦西邊の人である。京阪地方にも此種の畫家がゐたに違ひないが、未だその人その名を知ることが出來ない。

要するに是等の考證は直接小屏風郊外遊樂圖に關係する所はないけれども、後期の洋風畫を無落款であれば、直に司馬江漢となすことが早計であるが如く、前期に於ける同種の作品を動ともすれば山田右衛門作に歸することも亦早計であるので、右衛門作以外幾多の



右衛門作の存在を紹介しようと思つただけである。

(大正十四年六月、佛教美術)

## 海の星

今から五十年ほど前の明治七年に、そのころの大日本主教ベルナルド・プチジャンの允許を経て公教會から刊行された聖教日課といふ小冊子がある。私が見た本は故人上田柳村が祕藏し今京都大學の圖書館に珍襲するものである。故人は大正元年八月それに證註を附け序文を添へて雑誌藝文の上に翻刻したが、柳村が他界の翌年の秋、未亡人は故人が愛著したこの證註本を單行して世に頒つた。追善の至情こゝに至つたものとして私もありがたく戴いてそれを愛藏してゐる。この聖教日課中の祈禱文等は教會が新に翻譯したものでなく、實はこれら浦上其他の舊信者が世々口碑で語り傳へたのを蒐集したものだ故人が證言した如く、眞に學藝の士の注意をひくべき國文學上の價値ある一文獻であつて、私た

ちはそれを世に弘めたベルナルド師をはじめ上田君及同未亡人に感謝せずにはをられない。

聖教日課のうち「聖體を領けて後の誦」と題する十數篇の誦があるが、「聖母に向ふ誦」

に、別に「亞物海星」といふ私の愛誦する一篇を見る。首めの四行を抄するとかうである。

亞物海の星

天主の聖き御母

且卒世童身

果報いみじき天の門

とたゞみかけて、「聖瑪利亞頌徳の禱文」にもあるやうに聖母を讚美してゆく。羅句の原文によると、

Ave maris stella,

Dei Mater alma,

Atque sampervirgo,

Felix coeli porta.

殊に私のすきな文句は起句の「海の星」maris stella の二語である。私は嘗てそれを自著の書名に選ばうと思つたからであつた。ところが室生あたりの大和の山中に住む新知の友人木水君は、そのことを知つて私に一書を送り、海の星の一句に異常な感興を注がれた。木水君は、その海の星といふのは、この頃美しい仲のよい姿を見せてゐる双子座ではないでせうかと書送られた。書信は双子座が夜な夜なよく見える二月はじめに認められたのであつた。私はそのときあの誦文の海の星が双子座の兩星をさしたものでどうかは確かでないにしても、その推考には道理がこもり、その擬定には妙味があると感じたのであつた。わかき友は或る参考書の一節を抄出して、使徒パウロが二月の中旬、羅馬に航行のをりに乗つたアレキサンドリヤ船には、その舳先にディオスクリ即ちジュピテルの双子のしるしが刻まれてゐたといふ使徒行傳二八章に記した所を指摘し、それは丁度あの時代紀元六十年頃には、この星座は、海の荒れ易い一二月時分に終夜船の進路を導くかのやうに

輝いて、さて日出と共に西に没すると云ふ工合に特に航海者の保護神とあがめられてゐたからであらうと書いてよこされた。

スバルを含む牡牛星座と、參すなはちミツボシとして知られるオリオン星座とに隣してわれらの双子座の主星カストルとポルツクスとが輝く。大神ジュピテルがレーダに産ませた双生兒である。神話によれば、カストルが故あつて殺されたのでポルツクスもそのあとを追うて死にたいと願ひ、そこで神は二人を天界にのぼして星としたのだといふ。語義からいふとジュピテル即ちジウスの双生といふので希臘語でそれをデイオスクウロイと稱へる。ジウス大神の子息どもといふ義である。羅甸語ではそれをゲミニと呼び、英語のいはゆるトキンスに當るのである。希臘羅馬共に古くからカストル、ポルツクスの話は人口に膾炙してゐ、殊に羅馬には神社も建てられて武士や騎士の守護神であつたといふが、星としては古代に知られてはゐなかつたやうに思ふ。騎者としてその形相を現はされた淵源は遠いにちがひないけれど、星座として知られたのは、トレミイの天文學以來ではなからう

かなどと素人考へには推察されるのである。ホオマアの兩詩篇にもこの星はみえない。そのオデッセイ物語には有りさうだが無い。航海に關する星としてはスバルが支配してゐたばかりだ。イリアツド物語に敍せられたアキルスの楯にも日月と並べて星には、スバルやオリオンなどはあるが双子はない。羅馬ではヴァアデルのエイネアツド物語にも見えないけれど、ホレエスの詩には既に出てゐるといふ。双子星はどここの國の古文學にも俗傳にもスバルほどには夙く知られ弘く認められなかつたと見える。

印度の神話でも同じやうな双子の物語があるのは面白い。偶然の暗合ではなからう。月神とニンフとの間に出來た双生兒にアシユヴィニといふのがある。即ち希臘のデイオスクウロイであり、羅馬のゲミニである。この二男兒は印度ではアシユヴィニといふ名の示すが如く馬匹として現はされた。三角形をした三輪車を曳く驢馬の形にあらはされ、貨幣の面には双馬双星を以て刻みつけられたこともある。神人の疾を癒やす醫者と示現したのは、暴風をなごめる靈驗と異曲同工であらう。但し印度にてもやはりアシユヴィンは航海者の

守護神にもなつてゐたのである。日月が海面よりさし上る前景の天空の光輝は、印度でも希臘でも二輪車であれ駟馬であれ、そのかゞやかしい現象をば天がける馬の姿に比べたくなつたのは自然であらう。さればアシユヴィニも眉目秀麗の仲好しの兄弟と現じ、曙光の双神と見はされた。

私は印度のアシユヴィニもゲミニと同じ星宿であつたか否かを未だ明かにしないけれど、神話の由來は蓋し同一であらうと思ふ。ともかくも歐洲にあつては双子星は耶蘇紀元時代よりこのかた航海安全の守神としていつかれたことは事實であるが、天文と神話とをひきはなして考へて見ると上述のやうな古神話が印歐兩土の間に一致するのは面白いことである。

支那に於ては双子星は二十八宿のうち井宿に屬するが、後世の天文學では井宿に附屬する北河の三星中の主星がそれに當る様である。古典に於ては双子星は認められてゐなかつたらしいが、それには天文學上の理窟もあらうけれども、私たちはこの光輝ある双星を夜

の人々が漢土に於て何故見逃したのであらうかと怪しまずにはゐられない。參につゞいて、この双をどうして見とめなかつたのであらうかと不思議である。尤も西洋に於ても太古の詩文にはあらはれてゐない程であるから支那をとがめるわけにはゆかない。まして日本の如き星界に注意しなかつた國の古人にあつては、三ツぼしの外にこの双子ぼしを名ざさなかつたのも無理はない。

私はつい長談義をしてしまつたが、聖母をなぞらへた海の星といふのは、双子星ではないかと考へつかれた木水君の説に私が感興を惹いたのは、實は他の點であつた。それは、詩聖ダンテの生れたのは、古傳によると太陽が双子座に入つた時分すなはち五六月のころであつたと云ふことを連想したからである。神曲天堂界第二十二曲にそのことが見えてをる。いま山川丙三郎氏の譯本によつて示すと、

わがかの金牛に續く天宮を見てその内に入りしごとく早くは汝豈指を火に入れて引かんや

あゝ榮光の星よ、大なる力満つる光よ、我は汝等よりわがすべて之才（そはいかなるものなりとも）の出づるを認む

我はじめてトスカナの空気を吸ひし時、一切の滅ぶる生命の父なる者、汝等と共に出て、汝等とともに隠れにき

後ゆたかなる恩恵をうけ、汝等をめぐらす貴き天に入りし時、我は圖らずも汝等の處に着けり

汝等にこそわが魂は、之を己が許に引くその難所をば超ゆるに適はしき力をえんとて、今うやうやしく嘆願くなれ

金牛につゞく天宮とは、牡牛座に隣りする双子座をいつたものであるが、註釋者の言によれば、双子座の星はその下界に及ぼす影響によつて詩才や學才を啓發するとの古説があるので、ダンテはこれらの星々の影響の下に生れあはしたがために、その才能をかゝる星の光に歸すると歌つたのであるといふ。詩聖の生れた西紀一二六五年には五月十八日から六

月十七日までの間太陽双子座にあつたのだから、この日限間にダンテは生れたのだと解せられてをる。而もその日を五月の末となす説もあるといふ。されば私がいま六百六十年の後の五六月の交に方つてこの一小篇を草するのも因縁がないではなからう。さて詩聖は同じ二十二歌の末を

われ不朽の双兒とともにめぐれる間に、人をしていと猛くならしむる小き麥場、山より

河口にいたるまで悉く我に現はれき

かくて後我は目をかの美しき目にむかはしむ

と結んだ。美しき目とは、天界の導者たるベアトリイチェをさすのである。第二十七曲にも、「我をレーダの美しき巢より引離して」と見えてをる。双兒はジュピテルがレーダに生ませたものであるから、双子座を母親レーダの巢と稱したわけである。この外神曲にはあちこち双子座のことは出てゐるが、私は一々引くの煩を省く。

伯林の美術館に藏せられるポツチチエリの神曲畫帖を見ると、畫家は詩人が天堂界第二

十二歌の首めに於て

おどろきのあまり、我は身をわが導者に向はしむ、そのさま事ある毎におのが第一の頼みどころに馳歸る稚兒のごとくなりき

この時淑女、あたかも蒼ざめて息はずむ子を、その心をば常に勵ます聲をもて、たゞちに宥むる母のごとく

と歌ひ起した氣持ちをよく捉へて、ダンテがベアトリーチエに導かれて、恆星かゞやく第八天に階して昇る様子を巧に畫いてをる。詩人が危ふげに天女にすがるところ、一段上には二人して俯仰してゐるところ、それらの情致が繊細なるペン畫にて描出された。この第二十二圖や第二十三圖には、二人の下方に双子星が點出されてをる。私たちはベアトリーチエの形相が、この畫家が新春やヴィナスの出生などの名作で寫したモデルの女人によく似てゐるのを見とめる。

日輪井宿に在るころ生れたダンテを追慕し、その千古の傑作神曲を愛誦し、またポツチ

チエリの名畫に見入れば、聖母を讀して海の星となへ天の門とたゞへた彼の誦文にいふ所の海の星はどうしても双子星であつてほしくなる。沉んや使徒パウロが乗つた双子丸の漂海談をも想ひ起すと、是非さうしてしまひたくなる。船の舳先に双兒の神々を刻んだといふ古傳があるが、双兒に限らず船首に神人の容姿を彫刻する習慣は近代までつき、日本へ來航した南蠻船や紅毛船にも、畫で見ることが如く、さういふ彫物がついてゐた。現に平戸の松浦家にも一つ傳はつてゐる。足利の近在の古寺に存するカテキキ様の像なるものも、既に人も言ひ私も考へた如く、それを問答師から出たもので吉利支丹の遺物だとする一説も有力ではあるが、或は黒船の船首の彫刻とは見られないかとも思つてゐる。日本でも船を貨狄と稱してもをり、又刻してある文字にエラスムスと見えてゐるその文字の解釋からしてもかの木像は船に囚があるやうにも思はれるのである。——こゝは考證の場所ではないから、大概にしておくが、暴風の夜に帆柱の尖頭などにびかびか閃く怪しの光を俗に聖エルモの火となへる、そのエルモと云ふのも元來船を守護する聖エラスムスをさすのだ

さうだから、カテキ様のエラスムスも、有名な教學者たるそれより來たと説くよりも、考へなほして見てそれは船に因むものではないかとする方が自然かもしれない。最古く日本に來航した和蘭船の一にエラスムス丸といふのがあつたと云ふからそれと併せて考へて見ると新に啓發する所があらうと思ふ。海の星から話が船に及んでしまつたが、私はテニスンが悲曲モオド MAUD の末章第二十八章の第一節に双子星をよみこんだ句を示してこの稿を終らう。

句へる水仙の花しほみ、さてまた馭者星と

輝く双子星とが西に沈める參星のおくつきの上高う

榮冠の如く懸れる……

テニスンはしばしばオリオンを引きあひにうたふ。この同じ詩曲の第三章中にもあれば、ロックスリイ・ホオルにも銀の螢かごに比べたスバル星と共に徐に西にすべり去る大オリオンを並び擧げてをる。然し天の河を隔ててオリオンなどと遙に相對する双子星を憧憬し

た詩人はダンテをおいて誰があつたらう。

(大正十四年七月、女性)

## テオフィロ・ブラガと葡萄牙文學

今度葡國の革命後、新共和國の大統領に擬せられ、或は首相に仰がれたテオフィロ・ブラガ Theophilo Braga は、同國有數の文士、有名なる國文學史家として内外に響いてをる。予が此の夏藝文に「南風」の小篇を草するとき據つたのも、此老儒とヴスコンセルロス女史との合編にかゝる葡國文學史であつたが、虞氏の羅曼文獻學集成に收めた本書は、寧ろブラガの文學史に基いて女史が著述したものと見做すべきであつて、ブラガには別に國文學史上大小幾多の論著が存し、中外の典據となつてゐるのである。其大文學史は一八七〇年より一八八一年に至る十餘年間の論述で、其第十二、十三の兩篇はカモエンス史篇イストリアと稱し、前卷にはカモエンス傳、後卷には抒情詩派と敘事詩派との二派に分けてカモエンス

流派が説いてある。カモエンス時代の十六世紀から直に十九世紀に飛んで、中間の二世紀の沿革が抜けてゐるのでもわかる如く、本書は元と一部完全な國文學全史として編せられたものではなく、諸期の文學史を集成したものである。尤も近年再刊の際に完成したかも知れない。外に葡國文學史小篇マヌエルだの、同教程クルソイだのといふ小著もあり、又葡國文學史論ヒストリアといふ三度も改訂された書もある。葡文學上近代思想と題するもの、葡國文藝諸問題を論じたもの等は時勢に觸れた著述らしい。尙、葡國詞花集アントロギマや近代葡國詩林バルナツソの如き編著のあることも茲に並記しておいてよからう。要するにブラガの國文學上の功績は葡國文學史を始めて近代式に評論體に編した點にあるので、殊に其大文學史の如きは、専門の文獻學者の眼から見ると不完全な所が多く、材料の穿鑿も行届かず、事實や年代の錯誤や記事の重複、論評の矛盾も存してをるが、元と壯年時代の天才的の論纂で、一氣呵成の文であるから、長短あることは免れない。

然し、一方には又父國の民謡や口碑を蒐集して、此に關する數部の編著もあり、俗謡の



蒐集家研究者としても盛名を保つ。故郷の俚歌を集めたアソリス鷹島民謡集、その他此種の著は、ブラガの本領の一端を顯はしたもので、其民主的精神と浪漫主義との發現に外ならずして、娛樂半分の蒐集とは由來を異にしてゐる。

ブラガは斯くの如く文學史家、俗謡研究者として名高いばかりでなく、自ら亦詩人の質を備へてゐた。名にし負ふアソリス鷹島の生れ、一八四三年 天保十四年十六歳にして既に綠葉と題する詩を以て聞えた。此群島は葡國の騷人を輩出した縁故のある地であるが、元來火山脈で、斷崖絶壁に富み、革命兒が搖籃の土たるに相應はしい感がある。さてブラガはコインブラ大學に在ては、法律を専攻したけれど、學位の論文は「法律の詩」といふ題であつた。二十四五の青春時代に、古詩人の遺蹟少からぬコインブラに在つて、ラクリマスケンク紅涙莊の貴妃の爲に涙を灑

いだか、ドシナイネス伊貴妃を名曲中に歌つたカモエンスの薄倅を回顧したかは、問題外とし、兎も角當時一八六四、五年の頃葡國抒情詩壇に新旗幟を翻へしたコインブラ詩派の一員として、今も傳ふる名詩の數々を詠んだ。ユーゴの「レジヤンド・デシエリケル世々の語草」と同工同趣と云はれる「時の幻」や「響

く嵐」の如き詩篇は、共に世界史上の題目を擇んだもので、二十一歳頃の作と稱せられる。

抑も此コインブラ詩派とは、極端浪漫派に對した反動の一派で、「ボニサウソ良知良味」Bon-senso e Bon-gostoの句を以て綱領とし、佛國の新詩派に接踵して起たので、一時は破壊的に進んで、短い狂瀾急迫の時期をも現出したけれど、漸く穩健な學究態度に轉じて、眞面目に中世以來の國民詩料の蒐集及研鑽に向ひ、俚歌童謡口碑方言の調査より古文學の新研究に入りて、茲に時流の文獻學風を生じた。此機運に由てブラガの俗謡集や文學史も出來たのである。然しながら、元來が枯淡な學者一方の團體ではなかつたのである。だから、決して始から穩健着實を目指したわけではない。舊浪漫派が、根は定型を脱せぬ感想の域内に於て、中世に關する覺束ない智識を土臺にして、激越な修辭上の工を競ふに過ぎないのに對して、一種の清新體を鼓吹したのが、此「ボニサウソ良知良味」の一派である。熱烈な戀愛詩の吟咏もあり、殊にハイネの感化も著しかつたが、一方には中世の國史にも通曉し、文獻の沿革をも攻究し、又一方には哲學流の綜合をも怠らなかつたのが、此派の特色である。加ふ

るに、時事に觸れ、政教に接して、醇乎たる文學の範を踏えるの嫌があつたのは、國柄とでもいふべきであらう。尤も同派中には、種々の流儀があつて、一律な調子の人達ばかり寄つたのではないが、其多くは學生上りの壯年で、反對派の徒は、既に王都に於て志を得名を成してゐた連中であるのを見ても、新運動の消息は自から解せられるであらう。政治と文學との没交渉な事も考へものであらうが、斯くの如く二者が深く關係し過ぎるのは、國の爲にも不祥、文藝の爲にも不利である。

近代哲學者流の中で、此詩派に最も深い感化を與へたのはヘーゲルとコントであるといふ。殊にコントの學説は、ブラガの信奉最も篤く、葡國に於ける實證哲學の宣傳者といへば、先づ斯人を以て宗とする。一八七七年、既に實證哲學概論を著し、尋で葡國政治の實證的解決、社會學總系の編述の前後に實證主義（ポジチキスム）と題する雑誌を創刊編纂すること、一八八〇年後數年であつた。又コントの學説に基いて、世界史を編したこともある。

斯くの如く、ブラガは文獻學者文學史家であると同時に、詩人文士であり、社會學者で

あると共に政治家であるといふ様に、多方面な傑物である。

予は今此傑士に就いて僅に上の如き部分的智識而も何人も二三の西籍に由て輒く知り得る程の智識を有するに止るが、既に本稿の初に一言した通りの由縁に由て、此カモエンス崇拜家の閱歴を傳へたさに筆を走らせた迄である。葡國浪漫派の率先者であつたガレール Garret が、郷土を謫せられて、初め英國に、後佛京に逐客となつてゐた頃、孤愁堪へ難く、古もかゝるためしのあるを聞いて遠流のカモエンスに同情のあまり、此國民詩人を主題にした郷愁の悲歌一篇を詠じて（一八二五年巴里刊）より以來、葡國雄飛時代の懷古に意を寓して、カモエンス熱漸く高まり、ブラガも既に此詩人の傳記及流派を三大卷に編み、又別に「カモエンスと國民感情」を著し、一八八〇年、此流竄詩人の三百年祭の節には、賈氏書目を出版したこともある位であるから、拙稿に因んで此革命文學者、否、愛國詩人の崇拜者を紹介しようと思つたのである。劇秦美新を草して王莽を頌した揚雄たるの毀りは、固より予が受くべき謂れはなからう。赤眉の兵が興るか、綠林の徒が起つか、前途測り難いけ

れども、要するに既に浪漫主義に於て一時期後れた葡國が、時勢後れの革命を今頃經過せなければならぬのは、憐むべき次第である。イベリヤ半島の今事とスカンヂナギヤ半島の現代とを對照して見よ、南風競はずとは是を謂ふ乎と嘆じたくなるではないか、これは昔のヴスコ・ダ・ガマと今のスエン・ヘデンとを比較して云ふのではない、イプセン等を輩出した北に對して、ブラガを生んだ南の振はざるを憐むのである。矢張時代後れかもしれぬが、バイロンを起して再びシントラの美を歌はしめると同時に、葡國の衰を弔はしめたものである。

革命家ブラガは一八七二年明治五年以來國都の高等文學院の教授として、葡國文學史を講じてゐたが、一八九〇年明治二十四年學士院の會員に推された閱歴のあることを最後に書添へておく。

(明治四十三年十一月)

大正十四年十一月五日印  
大正十四年十一月十日第一刷發行

續南蠻廣記  
定價金參圓



著者 京都市上京區小山中濠町十九番地 新 村 出  
發行所 京都市神田區南神保町十六番地 岩 波 茂 雄  
印刷者 京都市神田區美土代町二丁目一番地 島 連 太 郎

發行所

京都市神田區  
南神保町十六番地

岩波書店

電話四谷(五八七〇番)  
振替東京(七一六七番)  
二六二四〇番

# 南蠻廣記

新村 出 著

平福百穂裝幀

四六版五五〇頁 定價三円 送料書留廿七錢

## 一、西教篇

足利學校の盛時と西教宣傳。安土桃山時代の天主教教育。印度副王より豊臣秀吉に送つた書狀。南蠻寺の遺鐘。京都南蠻興廢考。慶長年間の京都耶穌教信徒の墓碑。徳川初期に於ける佛徒の耶教排撃。徳川幕府の耶教禁壓と儒者。林道春及び松永貞徳と耶穌會者不干ハビアン。

## 二、典籍篇

活字印刷術の傳來。天草吉利支丹版の平家物語抜書及其編者。南蠻本平家物語抄。吉利支丹版四種。西洋文學翻譯の嚆矢。文祿舊譯の伊會保物語。伊會保物語の漢譯。南蠻錄。攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹抄物。乾坤辨説の原述者澤野忠庵。メキシコ舊版の日本文典。

## 三、藝術篇

西洋畫傳來の起源。攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物。南蠻繪屏風解説。和蘭傳來の洋畫。洋畫史談。古銅版畫と辻蘭室。更紗の名義。更紗の語源。古渡りのゴブラン織。

岩 波 書 店



